

## オルグの鬼

— 労組は誰のためにあるのか

元 UI ゼンセン同盟組織局長兼副書記局長 二宮 誠氏

7月28日、元UI ゼンセン同盟組織局長兼副書記局長の二宮誠氏から話を聴く機会を得た。二宮氏は、大学卒業後ゼンセン同盟（現・UA ゼンセン）に入職、のちに伝説的オルガナイザーといわれた人物である。内容は、全体を通して労働組合に対する卓抜した愛着と熱意、そして格差・差別・貧困の社会は許さないという正義感に満ち溢れたものであった。その中から二点に絞って感想を述べてみたい。

第一点は、「未組織労働者のほとんどは労組があった方がいいと思っている」「ターゲットを決めたら（最初から関わった）オルガナイザーが完結すべき」という言葉に、氏の労組組織化への確信と執念を感じた。私は以前、「相手（経営者）に議論で勝つてはだめだ。高慢になるな。結成に勝つことが大事で、あとは負けたらいい」という氏の発言を耳にしたことがある。今回、貴重な体験談を伺い改めて氏の謙虚さと大胆さを兼ね備えた人柄に敬服した。



第二点は、氏が労組法第18条について闘われた体験についてである。私自身、不勉強でこの条文が機能したことを知らなかった。愛知県尾西地域の繊維・糸染めの労働者の事例を聴き、氏の「格差は許さない」という信念を粘り強く具体化された姿に感銘を受けた。レクチャー後調べてみたところ、第18条拡張適用事例は日本では8例しか実現していない。その一例が二宮氏の指導によったものだ。これは日本の労働運動史上に残る快挙であろう。「格差を認めたら経営者は努力しなくなる」という発言が特に印象に残った。（村杉靖男）